第四章　結果の分析

１．高校生の価値観ー４つの説明尺度

今回の調査の目的の一つに、高校生の多様な価値観を多角的に分析するための、説明尺度作成を試みることがある。設問1～25の「大切なこと」は、そのための質問であった。

本調査に先立って行なわれた予備調査の結果を受けて、そのための検討がまず実施された。予備調査の結果を因子分析したところ、寄与率１以上の５因子が抽出された。因子負荷の大きな質問項目（本調査とは若干の相違がある）から、これらの因子は「知的探究」・「自立」・「課外活動」・「校外交流」・「進路」と命名できるものと思われた。クラスター分析によってもこの傾向は確認できた。

予備調査は有効回答数306と小さかったので、このような因子構造が本調査ではより明確になることが期待され、それに基づく高校生の価値観についての説明尺度作成の見通しが立った。

本調査の結果を因子分析したところ、５因子では予備調査における「知的探究」と「自立」に相当する多数の項目が、寄与率の大きな第一因子にまとまってしまい、新たに「交友」が第５因子として出現した。そこで６因子で実施したところ、概ね予備調査と同様の因子構造が現れた。各因子ごとに、因子負荷.5以上の項目（但し該当の項目が３つに満たない場合は、因子負荷の大きなものから３項目）を整理したものが表4-1である。

続いて、この因子分析の結果をもとに、説明尺度の作成を試みることにした。そのために、各因子について次のように検討した。

第一因子「課外活動」は、寄与率も大きく、固有値も高い。因子負荷の大きな４項目の得点合計を出すと、その分布も正規分布近似とは言えないまでも山型になる。第二因子「知的探究」は、寄与率・固有値は、当然ながら第一因子よりは低いが、有効なレベルにある。項目得点合計の分布も山型である。以上の二つの因子については、説明尺度作成に用いても大きな問題はないものと思われる。

続く第三因子「自立」は、寄与率・固有値は第二因子に近く、また各項目の因子負荷も第二因子に接近しているが、項目得点合計は著しく偏っている。一方、第四因子「校外交流」は、固有値が６因子抽出の主因子法によれば１を下回ってしまうが、因子負荷の大きな３項目は他の因子からは独立しており、事前のいろいろな分析でも特徴的な傾向を示していた。項目得点合計の分布は上位に偏っているが、第三因子ほどではない。これら二つの因子については、このような問題点があることを踏まえた上で、説明尺度作成に用いることとする。

第五因子「進路」・第六因子「交友」は、寄与率・固有値が小さい上に、因子負荷が大きな項目を３つ以上取り出すことが難しい。したがって項目得点合計分布によるグループ分けも困難となる。これらの理由から、ここではこれらの価値観の因子としての可能性を指摘するに留め、説明尺度としては採用しないこととする。

以上の検討を踏まえ、次のように説明尺度を作成した。

(1) 第一～第四因子までを採用する。

(2) 各因子について、それぞれ表4-1に示す３～４項目の得点を単純合計したものを、高校生の価値観を探る説明尺度とし、それぞれ「課外活動志向」・「知的探究志向」・「自立志向」・「校外

交流志向」得点とする。

(3) これらの得点の低い（すなわちより「大切である」と考える）上位群、高い（すなわちより「大切でない」と考える）下位群を、概ね全体の25％程度ずつ設定し、グループ分け変数とする。

これらの得点分布とグループ分けについては図4-2に示すとおりである。なお、尺度作成においては、直観的理解のために、一切重み付けなどはしなかった。また、グループ分けの割合に生じるばらつきは「概ね３つのグループになる」程度までは許容せざるを得なかった。

表4-1 「大切なこと」因子分析結果（主因子法・バリマックス回転）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
11．生徒会や委員会、ホームルーム活動・・・	**.72**	.12	.10	-.05	.13	.08
12．学校の清掃・環境整備などの活動・・・	**.64**	.24	.20	-.04	.17	-.02
2．文化祭などの学校行事に取り組む	**.53**	.10	.10	.05	.06	.28
10．クラブ活動に取り組む	**.50**	.11	.09	.07	.07	.23
13．社会的な問題や生き方について議論する	.21	**.67**	.21	-.00	.05	.04
4．社会や人生に関わる、複雑で・・・	.11	**.55**	.18	.02	.08	.10
6．自分で進んで調査・研究をしたり・・・	.27	**.54**	.07	-.05	.25	.01
14．大作の小説や専門書など、手ごたえ・・・	.16	**.53**	.21	.00	.18	-.00
25．社会的に自立するための精神力を養う	.11	.36	**.56**	.07	.08	.08
21．人間としての幅広い知識や教養・・・	.11	.29	**.53**	.07	.23	.10
20．自分なりの意見や考え方を持ち、・・・	.12	.32	.44	.07	.09	.19
22．学校の外での遊びを楽しみ、・・・	.02	-.00	.12	**.67**	.01	.15
18．異性の友人とつき合ったり、・・・	.03	-.00	.05	**.59**	.03	.19
16．ある程度長期の・・・アルバイト・・・	-.01	.06	.01	**.58**	.03	-.05
19．進学や就職のための勉強に打ち込む	.14	.10	.27	-.01	**.53**	.15
7．英語検定などの検定・資格試験・・・	.25	.18	.03	.14	**.50**	.00
17．自分の将来の進路について情報・・・	.12	.19	.36	.03	.35	.20
1．心を開いて話せる友人を見つける	.18	.06	.15	.11	.05	**.50**
8．一緒に楽しんだり遊んだりする・・・	.19	-.07	.12	.30	.11	.45
5．尊敬・信頼できる先輩を見つける	.40	.25	-.01	.15	.11	.32
寄与率	24.2	6.0	4.5	2.5	1.8	1.4
固有値	6.1	1.5	1.1	.6	.5	.3

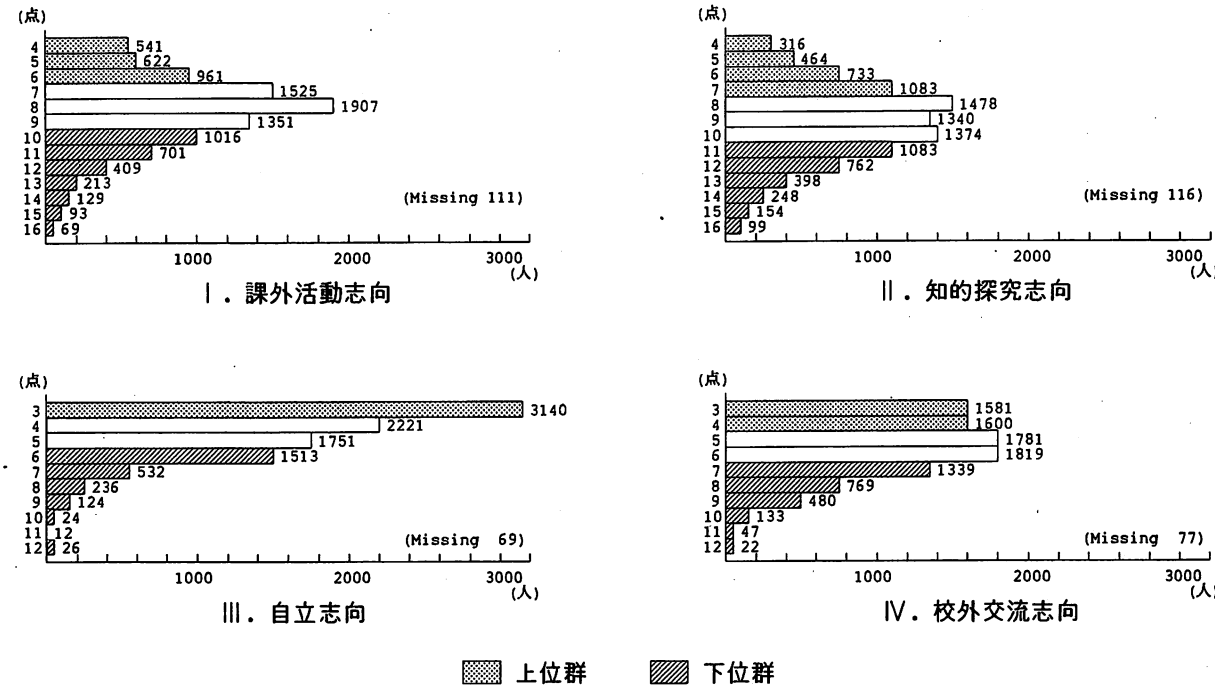

図 4-2 高校生の価値観ー4つの説明尺度

以下の分析には、このグループ分け変数と、26番以降の各質問項目とのクロス表を利用した。ただし、上述のような諸前提があることと、それぞれのグループ分け変数は、「～志向」と呼ぶものの、排他的関係にはないことに留意されたい。

2．高校生の志向と生活

(1)家族

家族についての調査項目は6項目であるが、関連して1項目を加え7項目とした。9項目だった前回の調査(1992年)と較べて項目数が減っている。今回は一部項目を整理・統合し、「家族からの自立」という視点から2項目加えた。調査結果は、第3章に示したとおりである。前回調査と質問項目が変わっているので、直接の比較はできないが、ほぼ同じような傾向を示しているように思われる。

回答結果から、日本の高校生の家族についての意識を全体として粗述すると、次のようになる。

「多くの日本の高校生は、小さかった頃の家庭の雰囲気は暖かかったと感じており、現在の家族生活に満足し、親・保護者との相互理解を持ち、親・保護者から信頼されていると意識している。精神的にも［親離れ］をしており、就職して経済的に自立したり、家族から独立して暮らすようになった時に、大人になったと考える者が多い。」

おそらくこの表現で日本の高校生の7割程度の意識を代表しているように思われる。この表現だ

けを見るならば、今の高校生は家族生活については、概ね安定した生活を送っており、家族関係、特に親や保護者との関係に満足している姿が浮かび上がってくる。このような生活を基盤として、自己の自立を目指しているのが、日本の高校生というイメージになるようである。

しかし、この結果を裏返して見ると、3割程度の高校生が、家族生活に何らかの問題や不満を持っているということになる。確かに、実際に高校生の諸君と面接などをしていて、親・保護者のことが話題になる時は、「自分の親は私の気持ちを何もわかってくれない」、「学校でのことは親には話さないで下さい」、「家にいてもちっともおもしろくない」など、どちらかといえば否定的な表現を聞く事が多いように思う。

どちらを強調するかで高校生のイメージも異なるだろうが、少し掘り下げて考察をしてみたい。前節で示した［高校生の価値観－4つの説明尺度」と家族生活の意識との関連性からどのようなことが言えるであろうか。

・「家族生活満足度」について

家族生活に満足している者は、課外活動志向、知的探究志向、自立志向については、いずれも上位群の方(すなわち「大切である」と考える者)が、下位群と較べて有意に多い(上位群：課外活動49.9%, 知的探究44.7%, 自立44.3%)。これらに対し、校外交流志向では上位群と下位群が概ね逆転する。

家族生活に満足しているということは、生活の場が家庭中心であるかどうかは不明だが、家庭で安定した気持ちでいられるということであろう。家族生活を不満とする校外交流志向のある高校生達は、「家庭外交流志向」でもあるのかもしれない。

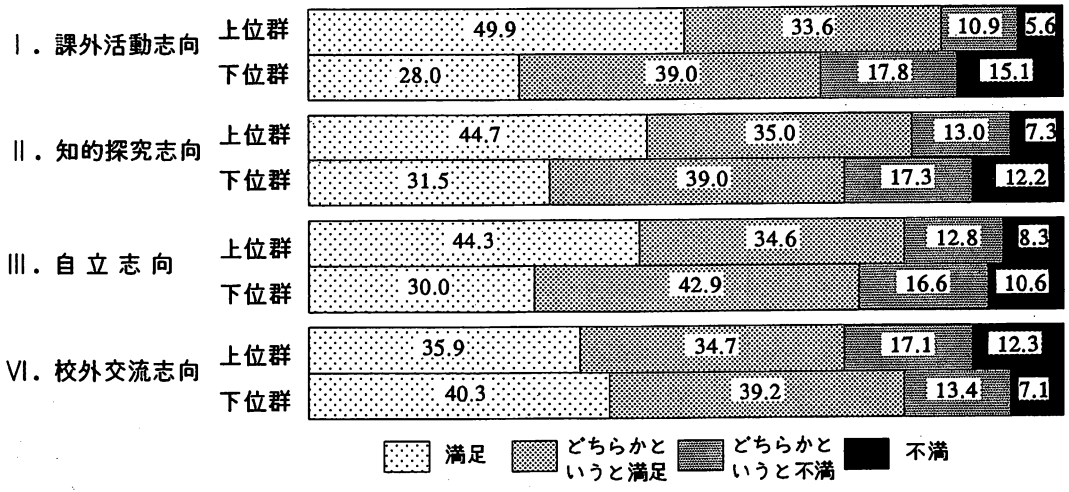

図 4-3　4つの志向と「家族生活満足度」

・「親／保護者との相互理解度」について

親・保護者と相互理解があると思う者について、課外活動志向、知的探究志向、自立志向では、下位群より上位群に有意に多い(課外活動34.0%, 知的探究31.1%, 自立31.1%)。相互理解があるとは思わない者では、校外交流志向で、上位群に有意に(15.6%)多い。

「家族生活満足度」と「親／保護者との相互理解度」については、校外交流志向上位群に否定的傾向があることが示唆された。

・「親・保護者との意見の対立」について

「勉強や進路」、「余暇の過ごし方」、「友人や異性とのつきあい」、「お金の使い方」で対立した者で

は、校外交流志向上位群で有意に多く(勉強・進路32.7%, 余暇14.7%, 友人20.1%, お金16.9%)、「アルバイト」、「生活態度」で対立した者では、課外活動志向下位群(アルバイト13.9%, 生活21.6%)と校外交流志向上位群(アルバイト16.2%, 生活23.7%)に有意に多い。「服装・頭髪や持ち物」、「バイクや自動車」で意見の対立があった者では、課外活動志向下位群(服・頭髪13.3%, 車10.6%), 知的探究志向下位群(服・頭髪12.3%, 車10.2%)、校外交流志向上位群で(服・頭髪14.4%, 車12.1%)、有意に多い。「人生観や社会問題」で対立した者では、知的探究志向上位群(15.2%)と自立志向上位群(14.7%)で有意に多かった。

「人生観や社会問題」を除くと、課外活動への志向性が低く、校外交流への志向性が高い者の方が、日常生活の様々な問題で親・保護者と対立していることが伺われる。彼・彼女達が、「家の親は理解がない」、「家はちっともおもしろくない」と言っているのが聞こえてくるようである。

・「親／保護者からの信頼度」について

親／保護者から信頼され責任を持たせてくれるようになったと思う者は、課外活動志向、知的探究志向、自立志向の各上位群に、有意に多い(課外活動31.8%, 知的探究30.6%, 自立31.0%)。信頼度が高くなったと思う者および高くなったとは思わない者の両者で、校外交流志向上位群で有意に多い(思う25.9%, 思わない17.4%)。校外交流志向上位群で、信頼度が分かれたというのは興味深い。信頼度が高くなったグループの高校生達が、どのような学校生活を送り、具体的にどのような校外交流を志向しているのだろうか。今後の調査では、もう少しこのあたりを個別に聞いてみると、我々の対応にも幅が拡がるかもしれない。

・「幼児期の家庭の雰囲気」について

幼児期の家庭の雰囲気が暖かかったと思っている者では、課外活動志向、知的探究志向、自立志向の各上位群に、有意に多い(課外活動65.9%, 知的探究61.6%, 自立61.6%)。

・「精神的［親離れ］度」について

精神的に［親離れ］をしていると思っている者のうち、課外活動志向、知的探究志向の各下位群(課外活動32.0%, 知的探究30.3%)と、校外交流志向上位群で有意に多く(33.0%)、他の設問と異なった傾向を示唆している。

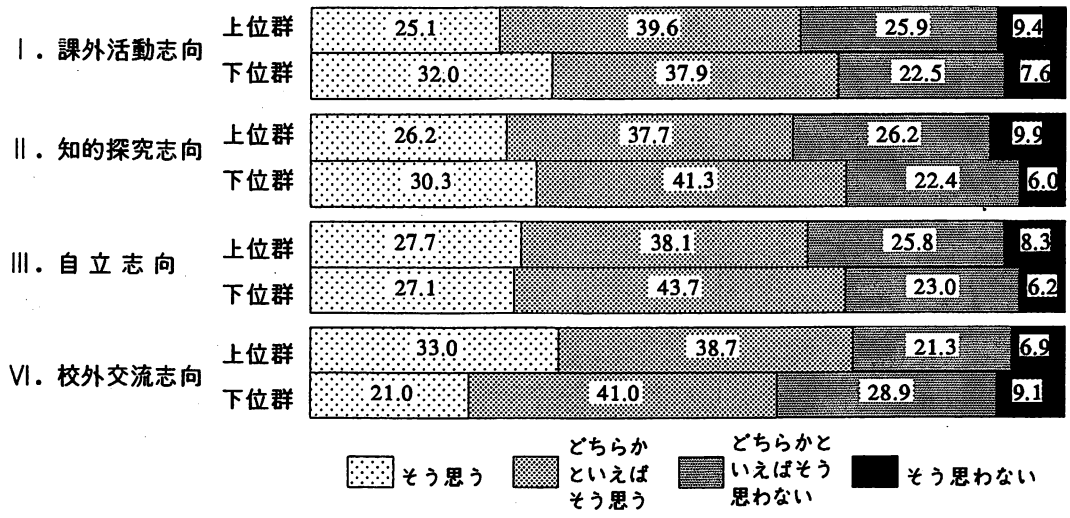

図 4-4　4つの志向と「精神的親離れ度」

高校生の諸君が何をもって精神的「親離れ」としているのか、次の設問32の「大人認識度」が参考にはなるが、具体的に知りたいところである。「親離れ」をしている者に男子が多く、女子に少なかったという結果と重ねて考えると、興味深い結果である。学校生活において、何事にも積極的，自主的，自立的に行動しているのは、女子であるのはだれも否定しないだろう。学校生活場面で積極的だからと言って、親から精神的に自立しているとは必ずしも言えない。しかし、青年が自立していくためには、家族や親に十分な愛情をともなった依存経験がなければならない。その意味で、高校生期は、巣立ちのための準備期間ともいえよう。この段階で早期とも思える「親離れ」をしているのは、ある意味で「不本意な・無理やりの親離れ」ということは言い過ぎであろうか。

・「[大人] 認識」について

一人前の大人になったと思える時期について、４つの志向の上位群、下位群ともに「就職して経済的に自立」する時が最も有意に多く(課外活動上位48.0%，下位40.7%，知的探究上位47.4%，下位41.4%，自立上位49.4%，下位41.6%，校外交流上位42.0%，下位49.7%)、次いで「家族から独立して暮らす」を選択した者で、４つの志向の上位群(課外活動11.4%，知的探究13.2%，自立13.1%，校外交流14.8%)および課外活動志向、校外交流志向の下位群(課外活動14.0%，校外交流14.0%)と「高校を卒業したとき」を選んだ者で、知的探究志向、自立志向の下位群(知的探究14.2%，自立14.1%)に有意に多いことが示唆された。

現代社会において、青年期と成人期の境界線がますますあいまいになっている中で、「就職して経済的に自立したとき」を挙げる者が多いのは、生活を支える基本である経済的自立を判断基準にした方が計りやすいからであろう。もちろん精神的に「おとな」になることの前提として、「自分の力で食べていく」ということがあるからでもある。

今回の調査で描かれた現代日本の高校生の家族像は、全体としては肯定的である。このような安定した家庭にささえられて、はじめて充実した高校生活を送ることができるのであろう。(もちろん、その逆が必ずしも真とは言い切れない。)「校外交流志向上位群」には、家庭生活を不満に感じている者が多いということもわかった。

我々教師は、危機的な場合を除いてはむやみに生徒の家庭生活に介入すべきではない。しかし、今回の結果から親子のコミュニケーションを促進したり改善することが、高校生の家庭生活をより豊かなものにするのではないかと思われる。親子の会話で、親が何を聞いても、子は「別に」と答え、さらに聞くと「うるさいな」となり、それでも聞こうものなら「関係ないだろう」と答えることがあるという。親子のコミュニケーションを促進するためには、保護者・親へのアプローチと子・高校生へのアプローチが考えられる。

高校生には、学校生活の様々な場面でコミュニケーションの促進・改善を行う機会がある(授業やＨＲでの意見発表やスピーチ、グループ討論、学校行事への取り組み、生徒会活動、部活動での後輩の指導場面など)。これらの機会を利用して、個々の生徒の発達に応じた促進・改善を行うことが可能である。さらに今後は「コミュニケーション」そのもについての発達を促すようなプログラムを開発し、カリキュラムの中に位置付けていくことが望まれる。

保護者・親に対しては、保護者会等で「親子の会話」について話題にしたり、コミュニケーションについての体験学習ができる機会を設定してもよい。このようなプログラムはアメリカなどでは、スクール・カウンセラーや教育相談係の活動である「サイコエデュケーション」の一つの機能である。今後の課題として、我々公民科の教師がスクール・カウンセラーらと協力してこのようなプログラムを作って、「生き方・在り方」教育を具体的に展開していくことが考えられる。

（2）学校生活

学校生活についての調査項目は7項目で、10項目だった前回の調査(1992年)と較べて項目数が減っているが、今回は一部項目を整理・統合したことと、いくつかの項目を「高校生にとって大切なこととその達成度」の方に移した。それに「通学義務感の有無」という項目を付け加えた。調査結果は、第3章に示したとおりである。前回調査と質問項目が変わっているが、ほぼ同じような傾向を示しているように思われる。

・「学校生活満足度」について

「学校生活満足度」を見ると、「満足群」が過半数を若干越えた程度にすぎない。約8割の生徒が「希望して入学した」のに、入学後学校生活に不満を感じているのであろうか。「高校生の価値観－4つの説明尺度」から考察してみると、課外活動志向、知的探究志向、自立志向については、上位群に学校生活に満足していると答えた者が約2～3割存在しており、有意に多い(各29.0%,21.2%,20.9%)。校外交流志向では、下位群に学校生活に満足感を持っている者が有意に多い(18.2%)。これは、学校生活の中で、自分が打ち込みたいものが見い出せない生徒が、学外への交流を志向するようになったからであろうか。

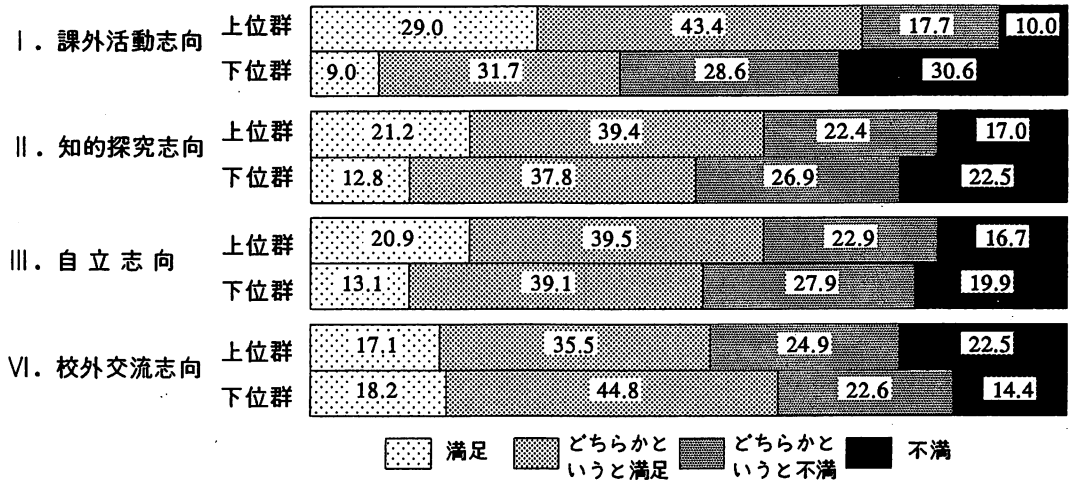

図 4-5　4つの志向と「学校生活満足度」

・「在籍校の希望入学度」について

課外活動志向、知的探究志向、自立志向については、その上位群に希望して入学したと答えた者が約6割存在し、有意に多くなっている(各60.7%, 55.5%, 54.6%)。校外交流志向については有意な傾向は見られなかった。

・「授業理解度」について

これも、課外活動志向上位群(12.8%), 知的探究志向上位群(13.4%), 自立志向上位群(12.6%)に理解していると答えたものが有意に多い。校外交流志向では下位群に授業を理解していると答えた者が有意に多い(11.6%)。

「学校生活に満足しているか」、「在籍している学校は希望して入学してきたのか」、「授業を理解しているか」といった点は、生徒が学校生活を送るスタンスの基本になっていくと思われる。これらの点で、課外活動や知的探究や自立志向を大切だと考えている生徒は、ある意味で目的意識を持ってあるいは何らかの居場所を学校に見い出しているのではないかと考えられる。それ故に、基本的に学校生活を積極的に送っているという感覚を持ち得ているのであろう。目的意識を持たず、学校での居場所も見い出せない生徒は、学校の外に気持ちが向かうのも当然かもしれない。しかし、そう言い切ってしまう事が許されるのであろうか。「先生、アルバイト先で知り合った友だちには生き生きしている人が多いし、人生について色々教わる事がありますよ」と言った生徒がいたが、アルバイトをしている高校生全体が目的意識もなくその場しのぎに生活をしている者とはいえないだろう。学校に居場所が見い出せないのは、むしろ学校側の問題かもしれない。せっかく希望に燃えて入学してきた生徒が満足感を持てるような生活の場を提供できないものだろうか。ここで我々は、学校側スタッフの姿勢が問われていると受けとめて、今後の高校教育の在り方を考えていくべきではないか。

・「卒業後の進路希望」について

課外活動志向の中で上位群には、「４年制大学(４大)」が多く(58.7%)、「専修・専門学校(専門)」、「短期大学(短大)」が続いている。下位群には、「４大」(46.7%)が多く、「専門」、「就職」が次いで多い。知的探究志向の中で上位群には、「４大」(64.9%)、「専門」が多く、下位群には「４大」(41.2%)、「就職」、「専門」希望者が多い。自立志向の中で上位群には「４大」(59.9%)、「専門」が多く、下位群には「４大」(43.8%)、「就職」、「専門」が多い。校外交流志向の中で上位群には「４大」(47.9%)、「専門」、「就職」が多く、下位群には「４大」(60.0%)、「専門」、「短大」希望者が多い。(以上、有意差あり)

４つのどの志向群においても「４大」希望者が多く、志向別、上位下位群別に割合に差が見られる。校外交流志向の上位群およびその他の志向の下位群に「就職」希望者が多く見られる。

全ての生徒の進路保障をしていくのは(進路先を決めることとは直接結びつかないが)、学校側の重大な課題である。「４大」希望者が多数を占める中で、彼・彼女の進路を保障するという名目で、いわゆる「受験指導」に力を入れたくなる気持ちはわかる。しかし、以上の結果を見ても大学受験の指導だけをしているだけでは、高校生の学校生活にかんする満足感は得られないであろう。生徒の進路希望実現の援助をしながら、同時に課外活動や知的探究ができる時間を学校側は作るべきであろう。そのためにも、過熱気味の受験教育を是正する入学制度の抜本的な改革を、教育行政は緊急に実行すべきである。

・「高校教育における指導についての期待」について

「高校教育における指導についての期待」では、「基本的生活習慣」への指導は期待されていない。これは、日本の高校生が必ずしも基本的生活習慣が身についているから不必要ということではなく、「指導」という形で学校や教師からとやかく言われたくないという高校生の気持ちの表れと思われる。おそらく教師自身も生徒の基本的生活習慣の指導を積極的には望んではいないが、実際には多くの時間を割いているのも現状である。

「知識・教養」、「進路」、「人格形成」指導はほぼ同じ割合で期待されているが、４つの志向群に特徴的なのは、各上位群に「人格形成」の指導を期待する割合が多く(課外活動35.2%, 知的探究37.4%, 自立36.6%, 校外交流36.4%)、下位群に「進路」指導を希望する者が多い(課外活動36.4%, 知的探究40.0%, 自立42.2%, 校外交流は「知識・教養」指導で36.9%)ということである。

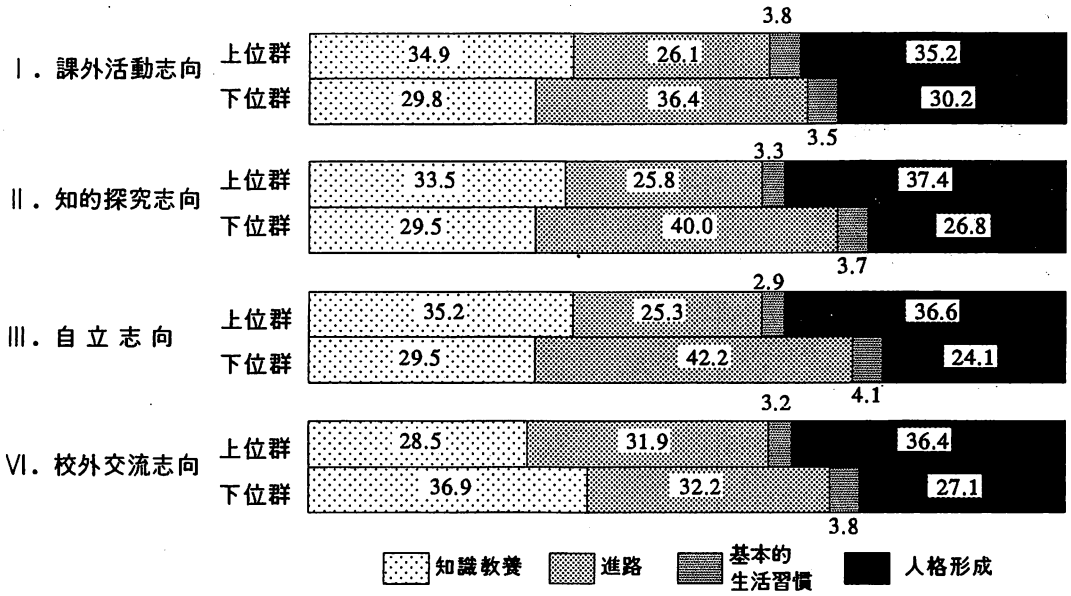

図 4-6　4つの志向と「高校教育への期待」

・「通学義務感」について

通学義務所有感を持つ高校生が78.3%だったが、毎日通うべきだと思わない高校生群が21.7%存在することをどう考えたらいいのだろうか。最近の不登校生徒や中途退学者の増加などにも関係してくるのかもしれないが、今後の調査の課題としたい。「そう思う」は課外活動・知的探究・自立志向では上位群に多く(それぞれ65.5%, 53.5%, 53.6%)、校外交流志向では下位群に多い(55.2%)。

・「生き方・ものごとの見方で考えさせられた場面」について

「生き方・ものごとの見方で考えさせられた場面」では、「友人関係」と「クラブ活動」が多かったのは、高校生の立場から見ると、ある意味で当然のことのように思われる。学校には友達に会いに来ることを目的としている高校生やクラブ活動に真剣に打ち込んでいる姿を我々は見ているから、その場面で生き方やものの見方を考えさせられることがあるだろう。しかし、高校教育の柱の一つであるホームルーム活動、生徒会活動や学校行事を挙げる生徒がわずかなのは、それらの現状が機能していないのだろうか。それとも日本の高校教育の在り方を基本的に考え直す必要があるのか、これも今後の課題である。

「授業」「先生との関係」が少数ながらあげられている。日常の自己の授業や生徒との関係を振り返り、高校生に少しでも意味のある時間を提供したり、より援助的な関係を築いていきたい。

4つの志向群との関係で見ると、ここにも特徴的な対応が見られる。知的探究志向では上位群に「授業」(19.0%)・「先生との関係」(11.3%)が有意に多い。そういう経験があったからこその志向なのか、もともとの志向がそういう経験をもたらしたのかは分からないにしても、おそらくは高校生段階ではこれらの志向と経験とは相乗効果を生み出すであろう。校外交流志向では「授業」は上位群が低い(下位群17.4%、上位群13.0%)。「友人関係」は4つの志向の全てにおいて上位群が有意に多く、とりわけ課外活動志向では上位群(65.5%)と下位群(51.9%)の差が最大である。しかし差が最も小さい校外交流志向でも上位群62.7%、下位群56.3%であるから、大きな違いはない。これに対して、当然ではあるが、「クラブ活動」・「生徒会活動」は、課外活動志向上位群はそれぞれ37.0%・9.0%、下位群15.3%・3.5%となり有意差が認められるが、他の志向では有意差は見られない。「学校生活では経験なし」は課外活動・知的探究・自立志向では下位群に有意に多い(21.2～26.7%)が、校外交流志向では上位・下位群間に大きな差がない。

今回の結果から、これからの学校生活の在り方について、いくつか考えてみた。

① 学校生活において、「課外活動」を重視するとともに、一部を学校外の教育機能に委ねていく。

現在の特別活動を活性化して、その充実を図る。「課外活動」の中で、生き方やものの見方を学ぶ者が多いことからも、今後も活発な活動ができるように保障していきたい。そのためには指導スタッフを学校の外から幅広く受け入れる。また、社会教育などの学校外にある教育機能を利用して、生徒の学校外での活動にも単位を認定していく。学校で行ったり、学校の先生に習うことに抵抗のある生徒は、この制度でかなり充実した生活を送れるのではないだろうか。

② 個々の生徒に、自由に自己の知的探求心を伸張していくことを目的とした授業時間を確保する。

教師が考えた授業プログラムではなく、プログラムの展開までも生徒自身の主体性に任せる時間があってもよいのではないか。もちろん従来の教科指導でも十分に生徒の知的探求心を追及することは可能である。ここで強調したいのは、力点を生徒自身のやる気において、知的活動を行うということである。このことによって、自分が勉強するのだという自覚も生まれるであろうし、そのためには基礎的な知識を丁寧に学習していくことの意義も再認識されるであろう。

③ 学校行事の参加にも選択制を導入する。

入学式、始業式、終業式、体育祭、合唱コンクール、進路講演会、文化祭、弁論大会、遠足、修学旅行、遠足、演劇鑑賞、映画教室、マラソン大会、林間学校、水泳合宿、スキー教室、３年生を送る会、卒業式等々！　高校生活を豊かにする様々な学校行事も、あまりに多いと、単に行事をこなしていくことになってしまわないだろうか。生徒が高校生活に満足できないことの理由の一つに「多忙である」ということがあるのではないかと思う。多忙すぎて達成感を得るまでにその行事に集中できない、味わうことができない、気持ちが拡散してしまう。ある行事の直前にもう次の行事の話合いをしなければならなくなることがしばしばある。

そこで、学校行事の参加にも選択制を導入したらどうだろう。学年単位、クラス単位、個人のレベルで、行事の中からいくつかを選び、自己のやりたいことに集中するのである。例えば、修学旅行の参加は希望者だけにし、参加した者には単位を認定するなど。

④ 生徒にも年次休暇制度を採用する。

約２割の高校生が「毎日学校に通うべきだ」とは思わないという結果から、この年次休暇制度を考えた。最近、学校を欠席しがちな生徒が増えている。彼・彼女らには学校に行きたくないという不登校感情があると言われている。不登校や中途退学者が増える中で、身体的・精神的に疲れた時には、年次休暇制度を利用して心のリフレッシュをはかることを、これからは検討されるべきである。

(注)参考：門　眞一郎　不登校の精神生理学　こころの科学62　1995.7　日本評論社

（３）友人関係

友人関係については前回の調査では、学校内の友人関係に絞っていたが、今回は場所を限定しなかった。多くの日本の高校生は友人関係に満足しているようであるが、人間関係が作れない者やいじめの問題もある。

課外活動志向、自立志向、校外交流志向の各上位群に友人関係に満足している者の割合が有意に多い(課外87.8%, 自立83.4%, 学外85.4%)。知的探究志向と友人関係との関係は関連性が弱いようである。

設問40で、学校生活で生き方やものの見方で考えさせられた場面について、最も多く選択されたのが、友人関係である。彼・彼女らにとって、友人関係は非常に重要であるが、約16%の人が友人関係に満足していない(設問37)。「友人」を作ったり、「友人関係」を維持するのが苦手な生徒も少数ながら存在するものと思われる。「友人関係」で多くの高校生が悩んでいる。今後の課題として、学校の中で「人間関係作り」のプログラムを作成し、実践していくことが考えられる。

以上、調査結果に基づいて、高校生の生活を家族・学校・友人という観点で考察してきた。最後に、我々教師にとっても生徒にとっても、両者の人間関係が重要であることを指摘して本論のまとめとしたい。

学校生活や学習活動や課外活動を充実したものにするためには、その場に生きて、生活している人間の関係性の質が問題になる。信頼感のある、安定した人間関係が存在してはじめて、学校が学校たりえる。生徒と教師の人間関係については、色々な調査でもその関係の希薄さが指摘されている。ここでは、石隈が提言している人間関係論を紹介しておく。石隈はムスターカスをヒントにして、教師と生徒の人間関係を3種類で説明している。①Being-In(Your World)：教師が生徒の世界に入る→教師は生徒の理解者　②Being-For (You) ：教師が生徒のために存在する→生徒を情緒的、情報的、評価的に支援していく　③Being-With (You)：教師と生徒がお互いに一人の人間として生きる

石隈の人間関係論は、今後の学校の在り方を考える際の指針となると思う。教師と生徒の人間関係が深まれば、学校そのものがより人間的な生命体として輝いていくであろう。そのためにも、我々教師が具体的に行動していかなければならないが、ここで指摘したことが参考になれば幸いである。

(注)石隈　利紀　学校心理学と教師の援助活動　指導と評価　1995年9月

3．高校生の志向と社会意識

(1) 他の調査との比較

本節では、最初に今回の全倫研調査の設問の41から設問50のいわば社会意識について、いくつかの世論調査との比較を行なってみたい。もちろん、設問がまったく同じものではないため、厳密な意味での比較とはならないが、傾向をつかむためには参考になるであろう。

・夫婦のあり方に関して

設問43で「家事分担」についての質問をした。今回の全倫研調査では、家事分担についての次の5つを選択肢として用意した。その5つとは以下のものである。

「職業に専念し家事・育児は配偶者に任せたい」「職業に重点をおき、家事・育児の大部分は配偶者に任せたい」「職業も家事も配偶者の間で公平に分担したい」「家事・育児に重点をおき職業の大部分を配偶者に任せたい」「家事・育児に専念し、職業は配偶者に任せたい」。

このうち「職業も家事も配偶者の間で公平に分担したい」は男子で43.4%、女子で52.0%となっており、全体では48.2%である。

一方、1988年に実施された「日本人の意識」調査では次のような調査結果が示されている。

質問：「結婚した女性が職業をもち続けることについては、どうお考えでしょうか。リストの中からあなたのお考えに近いものを選んでください」

①結婚したら、家庭を守ることに専念したほうがよい → 23.9%

②結婚しても子供ができるまでは、職業を持っていた方がよい → 39.4%

③結婚して子供が生まれても、できるだけ職業をもち続けたほうがよい → 33.3%

（『現代人の意識構造（第３版）』ＮＨＫブックス、1991年）

この質問の③の回答を、全倫研調査の「職業も家事も配偶者の間で公平に分担したい」にあてはめて比較すると、全倫研調査の方が公平分担を志向する割合が48.2%と極めて高くなっているということが理解できる。家事分担の面での平等意識は、高校生の間ではいっそう広がっているということが言えそうである。

次に、夫婦別姓について見てみよう。設問44の結果は、全体では「同姓がよい（同姓）」(44.8%)と「同姓を原則として、別姓も認めるようにした方がよい（同姓原則）」(44.6%)がほぼ同じ割合であり、「別姓を原則として、同姓を認めるようにした方がよい（別姓原則）」(7.0%)、「別姓がよい」(2.9%)となっている。

一方、前掲の1988年の「日本人の意識」調査では、次のような調査結果が示されている。

質問：「一般に、結婚した男女は、名字をどのようにしたらよいとお考えですか。リストの中からお答えください。

①当然、妻が名字を改めて、夫の方の名字を名乗るべきだ → 41.6%

②現状では、妻が名字を改めて、夫の方の名字を名乗った方がよい → 28.9%

③夫婦は同じ名字を名乗るべきだが、どちらが名字を改めてもよい → 22.8%

④わざわざ一方に合わせる必要はなく夫と妻は別々の名字のままでよい → 4.7%

（前掲書）

ＮＨＫの「日本人の意識調査」と全倫研調査では質問項目がかなり異なっているので、単純な比較は危険である。しかしあえて比較をすれば、「日本人の意識調査」では別姓を支持する意見は④の4.7%と見ることができる。一方全倫研調査では別姓支持の意見が多くなっていることを読みとることが可能である。

・高齢化社会に関して

設問46で「高齢化社会」についてジレンマを含んだ質問をした。「日本では社会の高齢化が進みつつありますが、高齢人口が増えると、働く人たちが負担する年金の保険料や税金が高くなると言われています。福祉の充実とその負担について、あなたは次の二つの意見のうちではどちらに賛成しますか」。選択肢は次の二つである。「国民が受ける社会保障や福祉の充実のためには、個人の負担が増えてもやむを得ない」という、いわば負担を容認する考え方と「国民が受ける社会保障や福祉の水準を抑えても、個人の負担を増やすべきではない」という高負担には反対の考え方である。

今回の調査では、前者の負担を容認する意見は全体で64.0%、後者の負担の増加に反対する意見は全体で34.7%となっている。

この点について類似の調査として、毎日新聞社が平成４年に実施した「高齢化社会」に関する全国世論調査では次のような質問項目がある。

質問：「今後、高齢者が増えてと、働く人たちが負担する年金の保険料や税金が高くなります。この保険料、税金と福祉の関係について、次の二つの意見のうちで、あなたはどちらに賛成ですか。

①国民が受ける社会保障や福祉の充実のためには、個人の負担が増えてもやむを得ない　→　57%

②国民が受ける社会保障や福祉の水準を押さえても、個人の負担額を増やさないようにすべきだ　→　36%

＊（無回答　→　7%）

全倫研調査では、いわば高福祉・高負担を求め「不便・負担の容認」の割合が非常に高くなっているところが特徴的である。このような一般の世論調査との相違は、高校生の年代における、いわば理念的あるいは理想主義的な傾向を示しているといえるかもしれない。

なお、環境問題に関する質問やこの福祉に関する設問は、ジレンマを含む問題を作成した。この調査結果も参考にしていただき、授業の導入などで利用していただければ幸いである。

（2）4つの志向と社会意識との関係

次に「課外活動志向」「知的探求志向」「自立志向」「校外交流志向」の4つの志向による社会意識についての回答の差異を検討してみたい。

設問41の社会問題への不安については、知的探求志向・自立志向の上位群は、「日本の政治」について不安であると答える割合が高くなっている。具体的には知的探究志向では上位群18.3%に対し下位群13.0%、自立志向上位群が17.3%であるのに対し下位群は13.5%となっている。

「国際関係や紛争」についても同じような傾向がみられ、知的探求志向29.4－22.2%、自立志向28.6%－22.9%となっている。

「環境問題」では、課外活動志向57.4%－43.8%、知的探究志向55.3%－46.1%、自立志向54.2%－46.5%と、いずれも上位群が高い。

その他の項目には、いずれの志向でも上位群と下位群で有意な差はみられなかった。

設問42の「理想とする暮らし方」についての質問では、課外活動志向・知的探究志向・自立志向においては、「職業を通じて自己を表現する」と答える割合がそれぞれ、16.5%－10.9%、19.9%－7.7%、17.6%－8.9%と、上位群が下位群より高くなっている。

設問43の「家事分担」についての質問では、同様に課外活動志向・知的探究志向・自立志向において、「公平分担」が上位群－下位群でそれぞれ50.9%－46.2%、55.8%－42.1%、52.8%－44.1%となっている。

設問44の「夫婦別姓」については、知的探究志向・自立志向の上位群は「同姓」よりも「同姓原則だが別姓も可」を支持する割合が高く、それぞれ、50.2%－38.1%、48.4%－39.7%となっている。課外活動志向・校外交流志向は、上位群でも「同姓原則だが別姓も可」を支持する割合が高くならない。

設問45の「環境問題」については、課外活動志向・知的探究志向・自立志向上位群は、「環境破壊を現状より進めないためには物不足・物価の上昇・サービスの低下など不便や負担が生じてもやむを得ない」という回答が、82.7%－71.8%、83.4%－69.2%、81.7%－68.6%と高くなっている。こ

れに対して校外交流志向では、不便・負担を容認する意見は74.2%－81.4%とほかの志向と異なった分布を示している。

設問46の「福祉問題」についても、課外活動志向・知的探究志向・自立志向上位群は、高福祉・高負担を容認する意見が、それぞれ、73.1%－54.7%、72.8%－55.1%、70.0%－57.3%と高くなっている。これに対して校外交流志向では、高福祉・高負担を容認する意見は、59.8%－70.0%と異なった分布を示しており、前問と同じような傾向を示している。

設問47・48では、情報化への期待と不安を尋ねている。まず期待の方を見ると、「生活が豊かで便利になる」という期待は知的探究志向の下位群と校外交流志向の上位群が高く、「障害者高齢者の社会参加の促進」という期待は課外活動志向・知的探究志向・自立志向の上位群が高い。「知識・教養を高める」期待はこれら３志向の上位群と校外交流志向の下位群で高い。「コミュニケーションの拡がり」への期待は課外活動志向・自立志向、および校外交流志向の上位群で高い、という特徴がある。ポケベルや携帯電話を活用して校外交流を広げる姿が現われているのであろうか。「期待なし」は課外活動志向・知的探究志向・自立志向の下位群に多い。

次に不安の方を見ると、「情報選択の困難」、「プライバシー」、「情報犯罪」では課外活動志向・知的探究志向・自立志向の上位群が高い。また、「管理強化」への不安を自立志向の上位群が高く示したのは、一般には知的探究志向との一致が多いこの志向の特徴を象徴しているとも言えるかもしれない。「不安なし」は課外活動志向・知的探究志向・自立志向下位群で高い。

これらを総合して、あえて思い切ったまとめを試みると、知的探究志向の上位群は、情報化に対してややシニカルである。自立志向上位群は「管理強化」を警戒している。校外交流志向上位群は、もっとも楽観的で、ひたすらコミュニケーションの拡大に期待している。課外活動志向上位群はこれらの折衷的なパターンを示している。こうしてみると、校外交流志向上位群は、情報化社会をもっともエンジョイする集団かもしれない。

設問49と50は、国際化に関する設問であるが、設問49では、「何とか教えてあげようとする」は、課外活動志向・知的探究志向・自立志向の上位群に多い。

設問50では、４つの志向と学校の国際化に希望することとの関係は、やや複雑になっている。

- 「歴史や文化を学ぶ」は知的探究志向・自立志向の上位群と校外交流志向の下位群に多い。
- 「外国の生徒たちとの交流」は課外活動志向・知的探究志向・自立志向の上位群に多い。
- 「外国の人(大人)の話しを聞く」は知的探究志向・自立志向上位群に多い。
- 「スポーツ・文化交流」は課外活動志向・校外交流志向上位群に多い。
- 「英会話」は知的探究志向・自立志向上位群に、「英語以外の外国語」はこれらに加えて校外交流志向の下位群に多い。
- 「外国への修学旅行」は知的探究志向・自立志向では下位群に多く、校外交流志向の上位群に多い。

ここでもあえてまとめると、知的探究志向・自立志向上位群は、歴史・文化・外国語・外国人との接触を志向する反面、「外国への修学旅行」にはあまり乗り気でなく、学校の日常の営みの中での国際化を求めている。校外交流志向上位群は「スポーツ・文化交流」・「外国への修学旅行」に乗り気で、日常をやや離れたところで国際化を感じたいと思っている。課外活動志向上位群はここでもこれらの折衷的な傾向を持っている。この設問は「学校でしてほしいこと」を尋ねているから、それぞれの志向がそもそも「学校」というものに総じて何を期待しているかが現われているとも言える。また、先の情報化へのスタンスの特徴なども併せて考えると、各志向とコミュニケーションスタイルとの関連が見えてくると言えるかもしれない。

（３）学校不適応問題との関連

課外活動・知的探究・自立・校外交流の４つの志向と、本調査で質問した社会意識との関連を見ると、課外活動・知的探究・自立志向と校外交流志向とでは、回答に大きな差があることがわかる。

これは、昭和61年•62年に実施された最初の「全倫研」調査の分類、「学校適応グループ」と「学校不適応グループ」に対応するものではないかと思われる。さらに、平成２年及び平成４年度に実施した「自己評価」を軸とした調査に関連させていえば、校外交流志向と「自己評価」の低い層とも対応するのではないだろうか。もしそうであるとするならば、いわゆる学校不適応に関する諸問題について一つの仮説を指摘できるのではないだろうか。

課外活動・知的探究・自立志向の回答では、「環境問題」「福祉の問題」に関するジレンマを含んだ問題などが典型的であるが、多くの点でいわば「進歩主義的傾向」「リベラリズム的傾向」が見られる。逆に校外交流志向の回答の傾向としていわば「保守的傾向」が見られる。

この点については教育という営み、あるいは「学校」制度は啓蒙主義的な傾向を持つものであり、その意味で学校や教員の持つ文化はどちらかというと進歩主義的なまたリベラリズムと親和的な関係にあり、このことは一つの仮説の域を出ないが課外活動・知的探究・自立志向が学校生活に適応しやすい一方、「校外交流志向」が学校や教員の持つ文化とは馴染みにくい文化を持っているため「学校不適応」と結びつきやすいということがいえるのではないだろうか（ただし、課外活動志向と、知的探究・自立志向との間にも、学校・教員文化の内のどこに親和的であるか、という違いが見られることにも注意しておきたい）。

『学びへの誘い』（佐伯胖、藤田英典、佐藤学編　1995年　東京大学出版会）によれば、「学習というのは基本的に『自分探し』だということになる。もう少し学問的な言葉で言えば、学習とは『アイデンティティ形成』－自分とは何者であるかが自覚的に明確になること－なのである」とし、自分探しとしての学習という考え方が示されている。そして、「自分探しに何らかの形でつまづいてしまうと、それは必然的に学習のつまずきになり、『学べない人間』になってしまう」とも述べられている。

今回の調査結果をいわゆる学校不適応問題と関係させて総括するのは、かなりの飛躍があるかもしれないが、今回の調査から、特に「校外交流志向」との関係で、学校は何ができるのだろうかということも再考する必要性があるようにも思える。いずれにしても、学ぶことの楽しさを生徒と共有できるような授業が求められているということはいうまでもないことであろう。

4．高校生の志向と公民科教育

（1）授業方法

各志向が選好する授業方法を表に示すと、次のようになる。

	講義形式	問題演習	作業学習	研究発表	調査学習	ディベート	視聴覚・情報機器	その他
Ⅰ．課外活動志向	29 / 30	17 / 16	19 / 12	20 / 11	16 / 12	26 / 17	61 / 57	5 / 11
Ⅱ．知的探究志向	31 / 28	17 / 15	14 / 15	20 / 11	18 / 10	33 / 12	57 / 61	6 / 10
Ⅲ．自立志向	31 / 26	16 / 16	16 / 15	17 / 12	16 / 11	29 / 13	60 / 59	6 / 10
Ⅵ．校外交流志向	29 / 31	16 / 17	16 / 16	14 / 15	13 / 15	20 / 23	64 / 54	8 / 7

上位群の選択者(%) / 下位群の選択者(%)

クロス表（上位群・中位群・下位群／選択・非選択）で有意差が認められた項目（カイ自乗検定にて $p < .0005$）

図 4-7　4つの志向と「授業方法の選好」

授業方法を能動的・受動的と大別した場合、課外活動志向・知的探究志向・自立志向の上位群が好むのは、どちらかと言うと能動的に属するであろう作業・研究・調査・ディベートである。どちらかというと受動的と考えられる講義・問題形式には上位群・下位群の統計的差異は認められず、また、視聴覚・情報機器は校外交流志向の上位群が好む。

なお、一般に下位群は「その他の授業法」を多く選んでいる。クロス表を作ってみると、家族に対して不満度が高い(設問22)・保護者と理解し合えない(設問27)・家庭生活に暖かみがなかった(設問30)と感じている生徒ほど、この「その他」を選ぶ傾向があり、言いしれぬ不満感が既存体系に対する不満に形を変えたとも考えられる。

学校行事に肯定的で、多くの問題に対しそれを直視しようとする姿勢が見られる課外活動志向・知的探究志向・自立志向の上位群が能動的学習を望むのに対し、全体的にはこれらを望む傾向は低い。では、一般に、作業・研究・調査の人気が低いのは何故か。勤務校の生徒100名ほどの意見を聞いてみた。

・勉強は理解できれば良いのでまとめあげる必要はない。
・めんどうな方法はわざわざ選択しない(他人にまとめてもらったほうがよい)。
・発表には、恥ずかしい・友人の力関係(ばかにされそう)など他の要因が加わる。
・テーマの範囲が狭すぎて　”やらされている”感を拭えない。

かつては、自らの遊び道具を始め、多くの物を自力で作り上げなくてはいけない時代であったが、現在は遊びから勉強にいたるまで、完全に近い形で用意され、子供達は受動的にそれをこなしていくだけであるという、「与えられる文化」が完全に定着したように思う。さらに、個人の独立度が増し、集団の中でも全体が有機体として動くのではなく、個として動き易い。授業も同じで、教室には大勢いるが、それぞれが勉強しており、個々の生徒と教員が授業を進め、生徒達の間の関係が希薄である。ディベート、グループ調査等、自分達で一から学び作り上げる授業方法がもう少し必要かもしれない。

（2）授業内容

各志向が選好する授業内容を表に示すと、次のようになる。

	日本の政治	日本の経済	国際政治・経済	青年の心理	世界の文化	日本の文化	世界の思想	日本の思想	情報化・国際化・高齢化など	環境・人口・資源エネルギーなど
Ⅰ．課外活動志向	17/14	13/14	22/18	22/23	27/25	18/13	20/21	9/9	25/14	40/29
Ⅱ．知的探究志向	18/15	13/14	26/15	21/24	29/24	16/15	26/14	10/7	24/14	40/29
Ⅲ．自立志向	17/15	13/14	24/15	22/22	29/24	16/16	23/15	9/7	23/15	38/30
Ⅵ．校外交流志向	15/17	14/13	20/23	27/16	27/26	16/16	19/21	8/9	17/22	34/37

上位群の選択者(%) / 下位群の選択者(%)

クロス表（上位群・中位群・下位群／選択・非選択）で有意差が認められた項目（カイ自乗検定にて $p < .0005$）

図 4-8　4つの志向と「授業内容の選好」

今現在、身近にある問題(情報化・環境等)ほど選択され易く、また、知的探究志向・自立志向と国際化(国際政治・世界思想)、校外交流志向と青年心理との関連がそれぞれ高い。

全体的には、環境・人口・資源エネルギーという身近でしかも地球規模の問題、世界の文化などの人気が高い。

では、外国には興味をもつのに何故日本に興味をもたないのか、前問と同じく100人程の生徒に聞いてみた。

・今の日本には夢・希望がなく、政治家も魅力がない。
・視野は広く持つべきだから。
・日本のことは小中学校でやったので、外国の方が好奇心がある。
・日本のことはある程度どうにかなるが、外国のことは知らないと海外で困るから。

同様に情報・環境に興味を持つ理由を聞いてみた。

・自分の存在に直結するから。

・映像ですぐ確認でき、簡単そうだから。

全体的に感じられるのは、次のようなことである。

1. 自分の身近かな物を深く掘り下げるよりも無関係な物を表面的に見たい。
2. 自分の損得にどれだけ換算できるかを考えてしまう。
3. 現代のﾍﾚﾆｽﾞﾑ化というような、日本の枠にとらわれない、国際化の急進。

ところで、前問と同様に教科内容と家庭環境の関係を見たとき、家庭に満足し(設問26)・保護者と理解し合え(設問27)・家庭を温かいと感じていた(設問30)生徒ほど、環境・人口・資源エネルギー等の地球的問題に興味を示し、家庭に対しその反対の感情をもつ生徒(設問26・27)は、やはりどこか不安なのだろうか、青年の心理に興味を示す。

さらに、保護者に理解されていると感じている生徒は、そこに大人社会への窓口を見いだすのか、または話題に上りやすいためなのか、日本政治を学ぼうとする傾向を見いだせる(設問27と設問52)。従って、

4. 授業方法・内容に対する生徒の姿勢は家庭環境と密接な関わりがある。

知的探究志向・自立志向の上位群は、世界的視野に立って自己の位置を確認しようとしているようであり好ましいが、一般的な高校生は映像化可能分野(環境・文化)を表面的に深く考えずに眺めたいという傾向があるようだ。一応関心は持つが、それを自己の問題としては捉えず、他人に任せ、関わりを持とうとはしない。この傾向が何に起因しているかは不明であるが、物質面では比較的裕福で、何でも与えられ、積極的に行動しなくても何とかなるという豊かな社会での危機感の不足、精神面では(離婚数・児童虐待の急増など)家庭愛に恵まれず、常に愛情飢餓状態にあり、それ故、無関心・無感情へ逃避する、等も一因となろう。

一方、客体である教科の方から考えた場合、情報・環境問題・国際化はまさに現代社会の技術力が生んだ現象であるが、果たして、現実の政治体制、現在の思考学習の体系がそれらに追いついているか否かの疑問がある。現代に起きている問題解決の指針を具体的に示していかない限り、表面の現象だけを事実として眺めるに留まり、その中で生きる自覚や、今一歩の積極参与が難しいのではないか。

5. まとめ

以上述べてきたように、設問1～25の「大切なこと」の回答を因子分析することによって、「高校生の４つの志向」を導き、その得点をもとに上位群・下位群を設定し、以後の各設問の分析に用いてきた。生活意識・社会意識・公民科の方法と内容については、すでにここまでの各節でまとめられているので、ここでは「４つの志向」について整理しておきたい。

(1)「知的探求志向」と「自立志向」の区別について

本章第１節において述べたように、「知的探求志向」と「自立志向」は、予備調査では分かれてい

たが、本調査では一つの因子にまとまりやすいものであった。結果的に、各設問の分析でも、両者は概ね同様の傾向を示した。しかし、いくつかの設問(48など)ではそれぞれの特徴を示唆する差異が見られたことや、予備調査を考慮すると、これらの区別を捨ててしまうことには若干の危惧もある。あるいは「自立志向」の独立性が今回の調査の設問では覆い隠されがちであったのかもしれない。

結論的には、われわれは「自立志向」を「知的探求志向」と統合せず、前述のような可能性をとって独立させたわけであるが、またこれらを寄与率の大きな第一因子として取り上げる分析も可能であろう。

(2)「課外活動志向」と「知的探求志向」・「自立志向」について

「課外活動志向」と「知的探求志向」・「自立志向」とは、全般的に見れば、ともに学校生活適応型の志向である。特に「学校生活満足度」を見ると、「課外活動志向」上位群の満足度が際立って高いことに気付く(図4-5)。

しかし、家族に関する設問でも、ほとんどが共通の傾向を示しながら、親との意見の対立のポイントが違ったり、学校生活で生き方・考え方を考えさせられた場面も違う。社会意識では、不安を感じる社会問題、夫婦の姓、国際化などに差が目立つ。学びたい公民化の授業内容でも違いがある。これらを総合的に眺めると、前者は後二者よりは社会問題や人生問題に対する知的な興味や地道な取り組みには弱く、やや保守的ではある。しかし、コミュニケーションや行動の面から見ると、前者は後二者よりも積極的であり、コミットメントの可能性は高いと言えよう。

(3)「課外活動志向」と「校外交流志向」について

「校外交流志向」上位群は、明らかに他の志向上位群とは異なった傾向を示している。しかし、強いて言えば「課外活動志向」上位群に近い選好が見られる。例えば、夫婦の姓・国際化などである。今回の調査では明らかではないが、これら二つの志向は、より深いところで共通する性向を示している可能性も捨てきれない。敢えて一般化すれば、「課外活動志向」上位群は、暖かい家庭に恵まれ、学校でも授業以外に打ち込むもの(特にクラブ活動)に出会うことで、学校に適応している。「校外交流志向」上位群にはこれらが欠けている。それゆえに、「学校は何を彼らに与えることができるのか」、あるいは少なくとも「学校は彼らにとって意味のある場所で有り得るか」が問われているといえよう。

リアリティ・セラピーの提唱者グラッサーは、学校改革にも発言と実績の多い心理学者であるが、生徒が描くものごとのイメージの「上質世界」に「学校」が含まれているかどうかを問い、「クオリティ・スクール」という概念を示した(W.グラッサー『クオリティ・スクール』サイマル出版会1994)。「校外交流志向」上位群にとっては、学校はおそらくこの条件を満たさないであろう。他の3つの志向の上位群は、とりあえずある程度はこれを満たしているにせよ、「課外活動志向」がクラブを離れたとき、「知的探求志向」・「自立志向」が受験勉強に呑み込まれたとき、あるいは生徒たちが何らかの反社会的な集団に自己のアイデンティティを見出そうとしたとき、学校は「上質世界」から転落してしまうかもしれない。

しかし、4つの志向のすべてにおいて、上位群は高校における指導として「人格形成」を求める割合が多いことに、最後にあらためて注目しておきたい(図4-6)。公民科の実践には、以上のような問題を、「人格形成のための指導」を期待する生徒の可能性を生かすことによって克服することが求められているのではないだろうか。